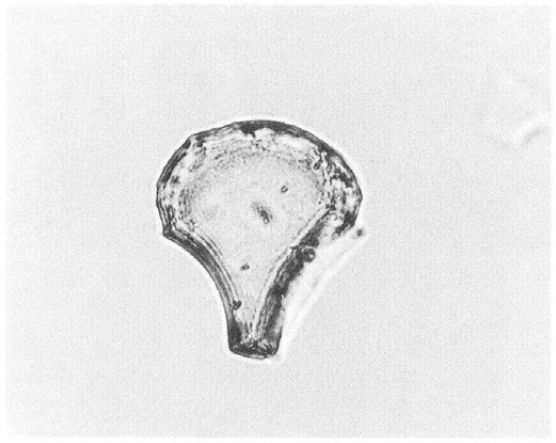
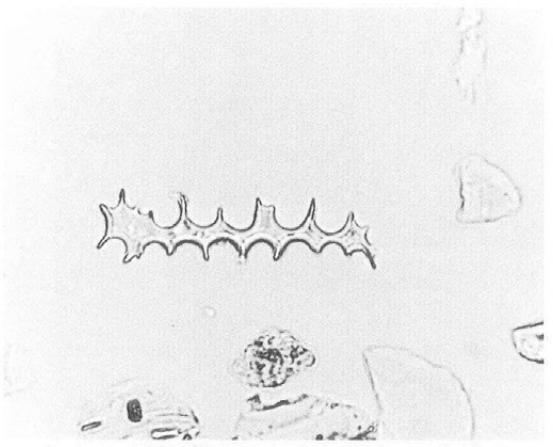
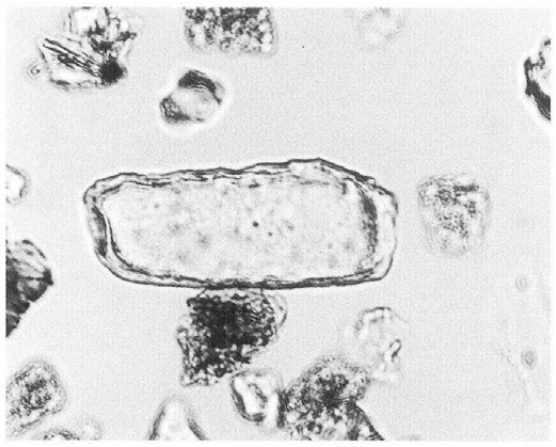
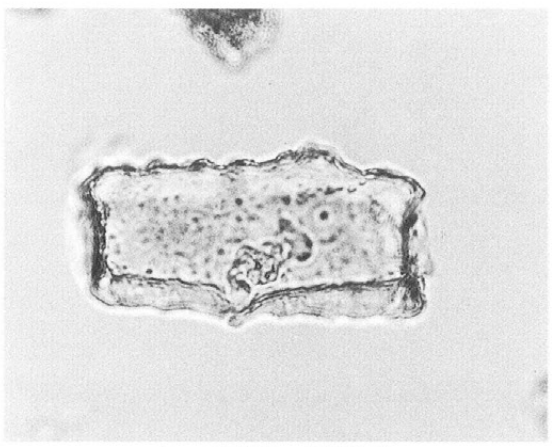
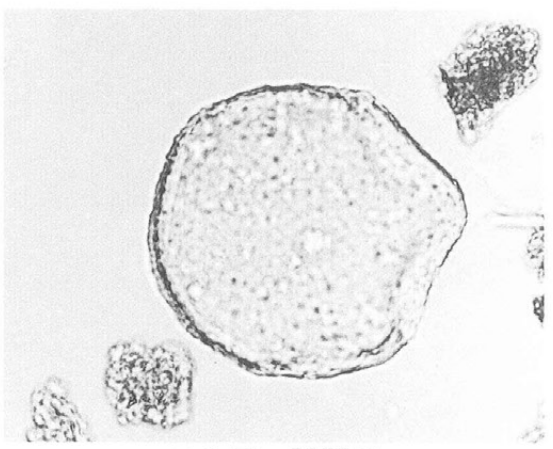

イネ　試料４

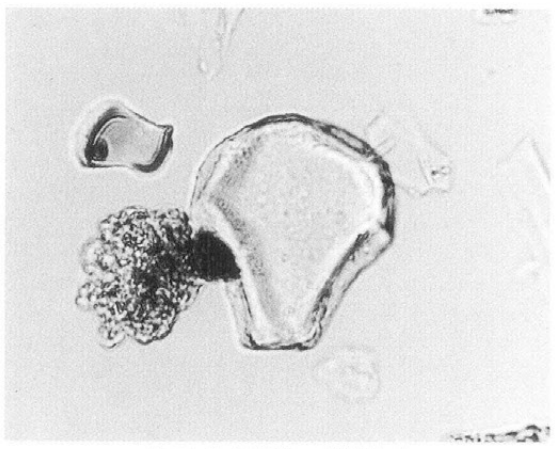
イネ　試料１

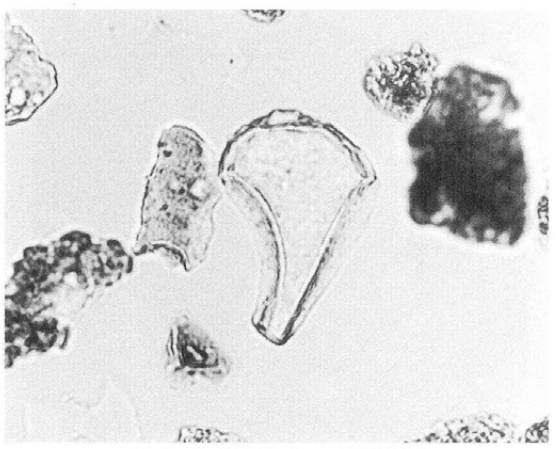

オオムギ族(穎の表皮細胞)　試料２

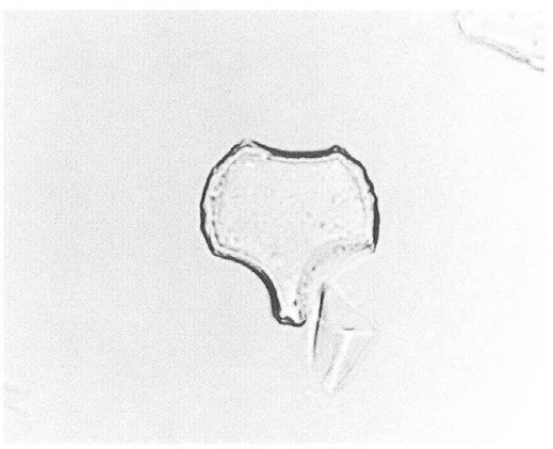

ヒエ属型　試料７

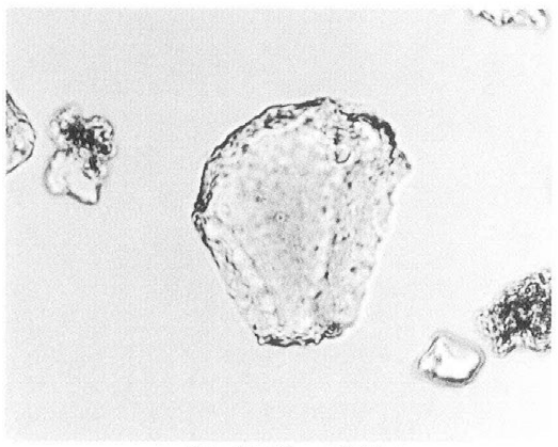

ヒエ属型　試料７

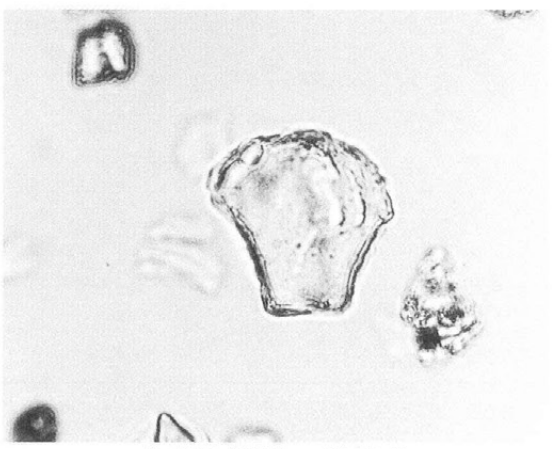

ヨシ属　試料13

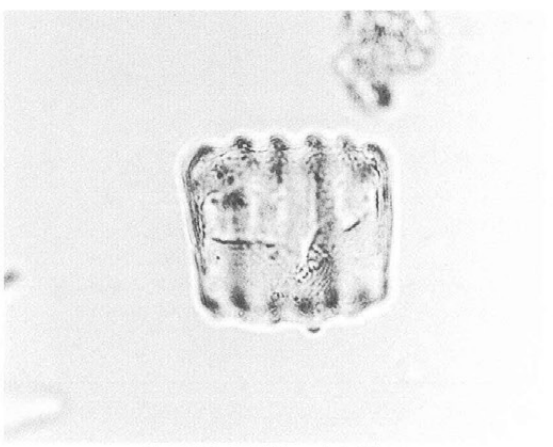

ススキ属型　試料４

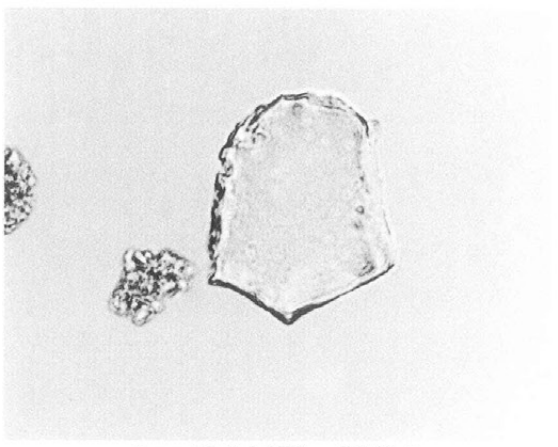

ウシクサ属Ａ　試料７

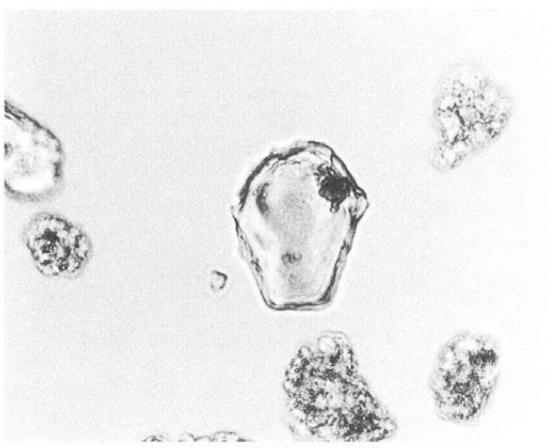

シバ属　試料１

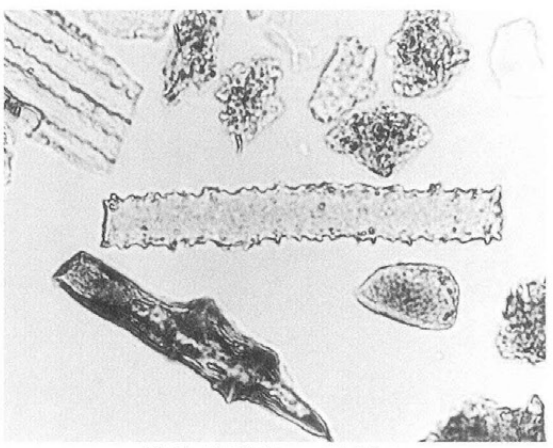

メダケ節型　試料１


ネザサ節型　試料２


ネザサ節型　試料５


クマザサ属型　試料８


マダケ属型　試料１


棒状珪酸体　試料６

※倍率はすべて200倍　0　100μm

柳川原遺跡第5次調査植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

第４章　まとめ

平成７年度から同15年度まで継続して実施した発掘調査によって、どのようなことが明らかになったのかを振り返ってみる。しかしながら、調査区域が必ずしも区画整理事業の対象地全面に及ぶものではないため、遺跡の全体像を詳らかにしたものではないことと、すべての出土遺物の分析が完了したものではないため、近世を中心とした概括的な検討結果であることを断っておく。

中央東部地区は西へ向かってゆるやかな傾斜をみせる開析扇状地上、大淀川の支流の年見川左岸に位置しているが、事業対象地内に同川の下刻によって形成されたと思われる段丘崖が認められる。柳川原遺跡第１次調査区と同遺跡第４次調査Ａ地区の間にある1.5～２mの段差がそれである。より西側の中町遺跡第１次調査Ａ地区と同遺跡第２次調査Ｂ・Ｃ地区は現状ではより北側の地点と標高差が認められないが、調査の結果、1.5～２mほど削られていることが判明しており、当初は前者と同様、段差があったものと考えられる。年見川に近い段差の北側の地形面では鬼界アカホヤ火山灰（約6500年前）直下に洪水によるとみられる砂・シルトの堆積が観察され（柳川原遺跡第２次調査Ｂ地区）、段差の南側の地形面では鬼界アカホヤ火山灰下位の桜島末吉（Ｐ11）軽石の下で縄文時代早期の土器が検出され、その包含層の下位に河川堆積物の砂礫層が堆積している（中町遺跡第２次調査Ｃ地区）。したがって、南側の地形面は縄文時代早期には比較的安定した地形面となっていたのに対し、北側の地形面は鬼界アカホヤ火山灰降下時まで離水していなかったと考えられる。弥生時代後期～終末期の遺構・遺物は上位の地形面の縁辺部と下位の地形面で検出されており、同時代の集落跡の広がりを推定することができる。また、後述するように両地形面では近世以降の遺構検出状況が著しく異なっており、地形面ごとの土地利用の違いがみられる。

当地区は近世の唐人町の東端部にあたる。文化･文政年間(19世紀第１四半期)に成立したとみられる『庄内地理志巻十四』中の唐人町･本町屋敷図（図32）と実際に検出された遺構群のあり方を比較してみよう。同絵図をみると、唐人町北縁部を東西方向に道が通り、その北側に水田が開かれていたことをうかがうことができる。柳川原遺跡の第１次調査・第２次調査Ｂ地区・第３次調査・第４次調査Ｂ地区では、近世以降の遺構検出密度が極端に低くなり、むしろ古代末～中世前期の遺構が目立っていた。これは先の屋敷図に記載されている唐人町北東縁部を通る道よりも北の調査地点にあたり、近世の町屋・屋敷地の形成が先に述べた段差の南側の比較的高い地形面を利用して進められたことを示している。

また、同絵図には高岡筋往還（現在の国道10号）に沿って町屋の家並が描かれているが、同道路に沿って現在まで短冊状地割が遺存しており、この地割は近世の町屋の区画を示している可能性がある。この町屋跡の区域では断片的な調査データしか得られていないが、中町遺跡第１次調査Ａ地区と同遺跡第２次調査Ｂ地区で短冊状地割の規制を受けた近代の建物基礎跡が検出され、中町遺跡第４次調査では、短冊状地割に直交する近代に埋め立てられた大規模な溝状遺構が検出され、中から多くの陶磁器などとともに中央東部地区遺跡群の中で最も多くの銭貨が出土した。この町屋跡の東側に武士とみられる人物の名前が記された屋敷の区画や寺院名が記されている。ここで検出された近世の屋敷跡は掘立柱建物跡、土坑、井戸跡等で構成され、周囲に区画施設としての溝状遺構が伴う。各調査地点に絵図に見える人物名を当ててみると、柳川原遺跡第４次調査Ａ地区が「大岩根五左衛門」、柳川原遺跡第５次調査区が「藤井弥右衛門」、中町遺跡第３次調査区が「山下政市」･「福留佐兵衛」、天神遺跡第３次調査区が「山路善右衛門」、天神遺跡第５次調査区が「乙守源兵」となる。天神遺跡第１･２次調査区にあたる部分は同絵図では切れており確認できない。柳川原遺跡第５次調査の結果からみると、屋敷地の中には小規模な畠、その周囲に竹林があり、宮丸堀の北側では天神遺跡第５次調査で検出された用水路跡とみられる溝状遺構や確認トレンチで見つかった近世の水田層から当該地には絵図にみられる水田の存在もうかがわれ、屋敷地と田園風景が混交した様相を想定できる。この区域では18～19世紀の遺構が顕著であり、確実に17世紀代と言える遺構を検出することができなかった。このことは当該地の整備が新地移り直後（17世紀第1四半期）からではなく、

領主館建設と同時に整備されたとみられる高岡筋往還沿いの町屋形成に遅れて、自然地形や中世からの地割をいかしながら少しずつ進行したことを示しているのではないかと考える。また、全体の出土陶磁器を概観すると、すでに横山哲英氏が18世紀以降に関して農村的色彩の強い久玉遺跡と比較したときに質の高い製品が認められることを指摘しているが、墨弾き技法が顕著な肥前系尺皿や薩摩焼竪野系の陶器に「千鳥印」をもつものが目立つなどの高級品を多く出土した城内の上級家臣団の屋敷地とみられる八幡遺跡と比較するとレベルが下がり、当遺跡の形成主体が下級武士や町人であったことを反映している。

注目される遺物として、柳川原遺跡第５次調査で出土した白磁製の中国象棋の駒がある。中国象棋は「将（帥）」、「士」、「象（相）」、「馬」、「車」、「兵（卒）」、「砲」の７種16個が紅と黒（紺）の２組に分かれ32個で構成され、最古の資料は北宋末～南宋初という。日本国内では沖縄県だけに出土例があり、本土では初出である。沖縄県の首里城跡では周縁部に青磁釉がかかる磁器製駒が２点出土しており、いずれも径４cm、厚さ1.4cmで、それぞれに「砲」と「兵」の文字が刻まれている。時期は15世紀中葉とされている。上原静氏は現在の沖縄において木製の伝世品が一般的なことを考慮すると、首里城跡の磁器製品はむしろ特殊な高級駒ではないかとしている。本遺跡出土の中国象棋の駒も中国製と考えられ、中国象棋は日本国内では普及しなかった可能性があること（増川宏一氏ご教示。）から、渡来人との関連が推察される。当地域の唐人町は、天正年間に飛地の内之浦に渡来した明人を都城領主北郷時久が安永諏訪馬場に住まわせたのがはじまりで、文禄４(1595) 年に北郷氏が祁答院（鹿児島県宮之城町）に移封になった際、祁答院の湯田八幡の鳥居のもとに移し、慶長５(1600) 年の本領復帰の際、下長飯村と宮丸村との境に湯田八幡とともに移し、元和元（1615）年の新地移りで現在の場所に移したという。さらに『庄内地理志巻十四』には、正保の頃（佐々木綱洋氏のご教示によれば、寛永期前半が正確ではないかとのこと。）、明朝末期の混乱を避けて広東省潮州から一官何欽吉・天水二官・江夏生官・清水新老・汾陽青音らの明人が内之浦に渡来し都城の唐人町に居住させられたという記述がある。一官何欽吉は医術や薬法に長けた人物で、万治元(1658) 年に没し、都城市の西墓地（同市鷹尾１丁目）に唐人墓地から移された墓石（県指定文化財）が残されている。中国象棋はこのような渡来系の知識人の盤上遊戯としてもたらされ、18～19世紀にはその役目を終え、屋敷周辺の溝の中に他の破損した陶磁器などとともに廃棄されたと考えられる。

その他、注目される生産活動に関しては、柳川原遺跡第２次調査Ａ地区や中町遺跡第３次調査地点から鞴の羽口や多量の鉄滓が出土しており、付近に鍛錬鍛冶職人や工房の存在が推定されている。また、柳川原第２次調査Ｂ地区・同遺跡第３次調査・中町遺跡第４次調査において幕末～近代にかけての遺構・包含層から三足ハマやトチンの出土があり、当遺跡の北方約500mにあったとされる窯跡群（嘉永５(1852) 年に都城島津家第24代島津久本の御用窯として開窯された宮丸窯や明治期の個人窯である小松原窯）との関連が推察される。実際の出土品の中からその製品を特定することは困難であるが、柳川原遺跡第１次調査出土の「松原」の押印銘のある陶器などがその候補としてあげられよう。　【文責：桒畑光博】

《引用・参考文献》

上原静　2004「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』新人物往来社
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
佐々木綱洋　2003「都城薩摩焼の系統と諸窯」『九州国際大学社会文化研究所紀要』第53号
清水康二　1998「古代象棋と将棋の伝来」『月刊考古学ジャーナル』№428　ニュー・サイエンス社
増川宏一　1998「将棋の発生と伝播」『月刊考古学ジャーナル』№428　ニュー・サイエンス社
永友良典・南正覚雅士・堀田孝博　2003『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集 宮崎県埋蔵文化財センター
松下述之　2001『天神遺跡第２次調査・中町遺跡第３次調査』中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　都城市文化財調査報告書第54集　都城市教育委員会
都城市　2001「庄内地理志巻14　本邑宮丸三　本町・唐人町」『都城市史』史料編近世Ⅰ
横山哲英・重永卓爾ほか　1997『都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書』都城市文化財調査報告書第41集　都城市教育委員会
横山哲英　1998『中央東部地区遺跡群柳川原遺跡（第１～３次調査）・中町遺跡（第１・２次調査）』中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　都城市文化財調査報告書第43集　都城市教育委員会

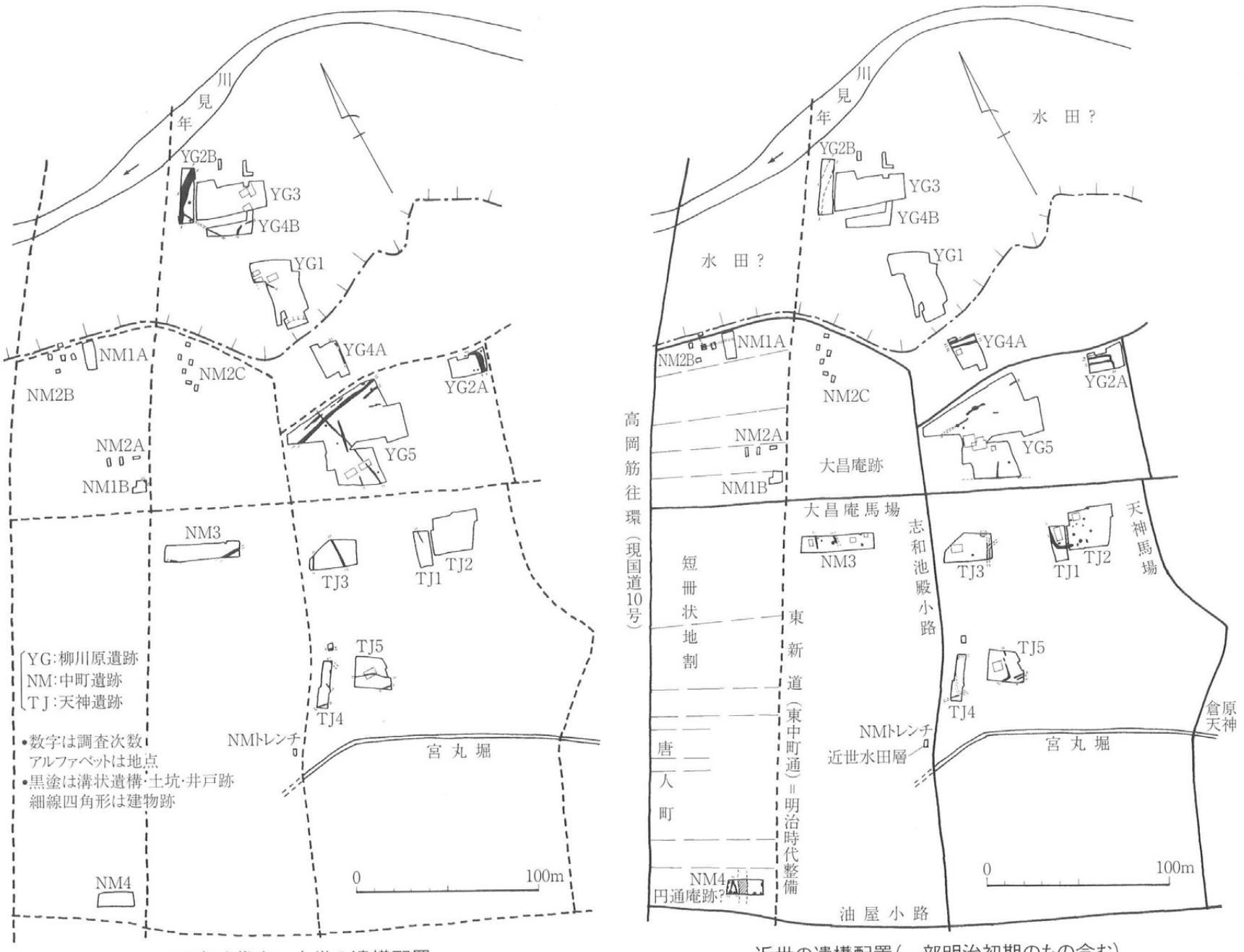
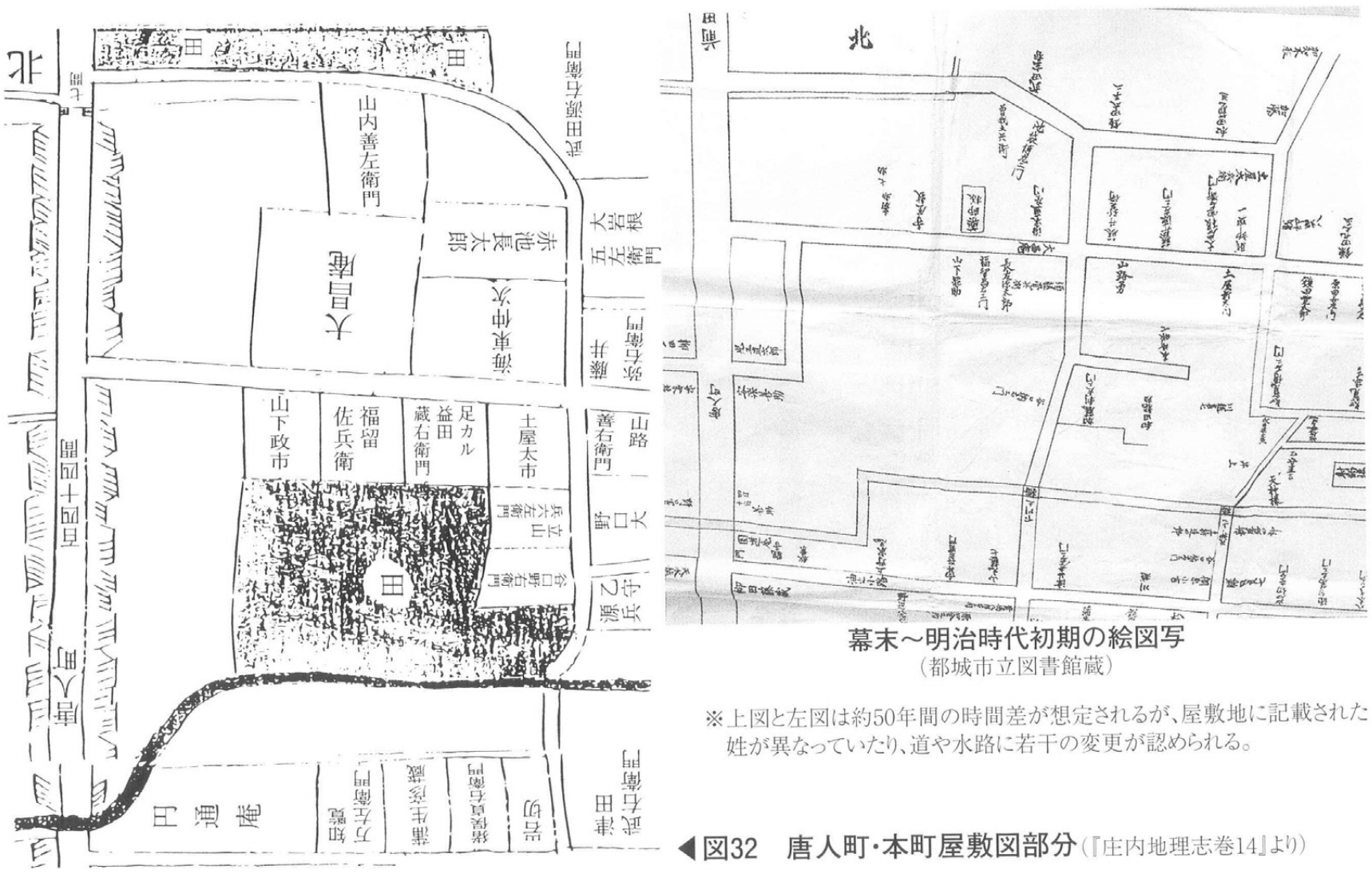


図31　中央東部地区遺跡群の遺構変遷



幕末〜明治時代初期の絵図写
（都城市立図書館蔵）

※上図と左図は約50年間の時間差が想定されるが、屋敷地に記載された姓が異なっていたり、道や水路に若干の変更が認められる。

◀図32　唐人町・本町屋敷図部分（『庄内地理志巻14』より）

報告書抄録

書　　名	都城島津家領の唐人町周辺の遺跡（みやこのじょうしまづけりょうのとうじんまちしゅうへんのいせき）					
副　書　名	中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第65集					
編著者名	松下述之・矢部喜多夫・桒畑光博					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所　在　地	宮崎県都城市姫城町６街区21号					
発行年月日	2004年３月31日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面　積	調査原因
柳川原遺跡（やなぎがわらいせき）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 天神町（てんじんちょう）	31° 43′ 23″	131° 04′ 09″	第４次調査 1998.6.3～7.24 第５次調査 1999.6.2～8.30 2000.1.5～1.14	第４次調査 1,650㎡ 第５次調査 2,840㎡	土地区画整理事業 （中央東部土地区画整理事業）
中町遺跡（なかまちいせき）	同県同市 中町（なかまち）	31° 43′ 19″	131° 04′ 03″	第４次調査 2001.4.2～7.3	第４次調査 150㎡	
天神遺跡（てんじんいせき）	同県同市 天神町（てんじんちょう）	31° 43′ 20″	131° 04′ 10″	第１次調査 1999.2.15～3.5 第３次調査 2001.6.11～8.30 第４次調査 2003.2.5～2.28 第５次調査 2003.4.25～7.4	第１次調査 160㎡ 第３次調査 500㎡ 第４次調査 200㎡ 第５次調査 280㎡	
遺　跡　名	種　別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
柳川原遺跡 中町遺跡 天神遺跡	町屋跡 屋敷跡	中世・近世・近代 （柳川原遺跡第５次調査で弥生時代あり）		掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑・井戸跡	近世国産陶器 肥前系磁器 清朝磁器 中国象棋の駒	近世の町屋及び屋敷跡が検出された。

【あとがき】

中央東部地区遺跡群の調査は、地区住民の方々や調査に従事していただいた市民の方々のご協力により無事終了することができた。ここに報告書を刊行するにあたり感謝の意を表します。

調査の中で特に印象に残ったことは、渡来系の人々の片鱗、幕末から近代への再編の波、その後の戦争の爪あと、そしてそれらの前歴をまるですべて消し去ろうかとするような現代の再開発の痕跡であった。

今、この地区において平成時代の区画整理事業がほぼ完了し、新たな街ができあがりつつある。この街の出発に際し、ささやかなこの冊子が文化の薫る、うるおいのあるまちづくりの参考となれば幸いである。　(M.K)

都城市文化財調査報告書第65集

都城島津家領の唐人町周辺の遺跡

中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

2004年3月31日

編　集　宮崎県都城市教育委員会

発　行　〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号

TEL(0986)23-9547　FAX(0986)24-1989

印　刷　株式会社みやこ印刷

付図　中央東部地区遺跡群（宮崎県都城市）全体図